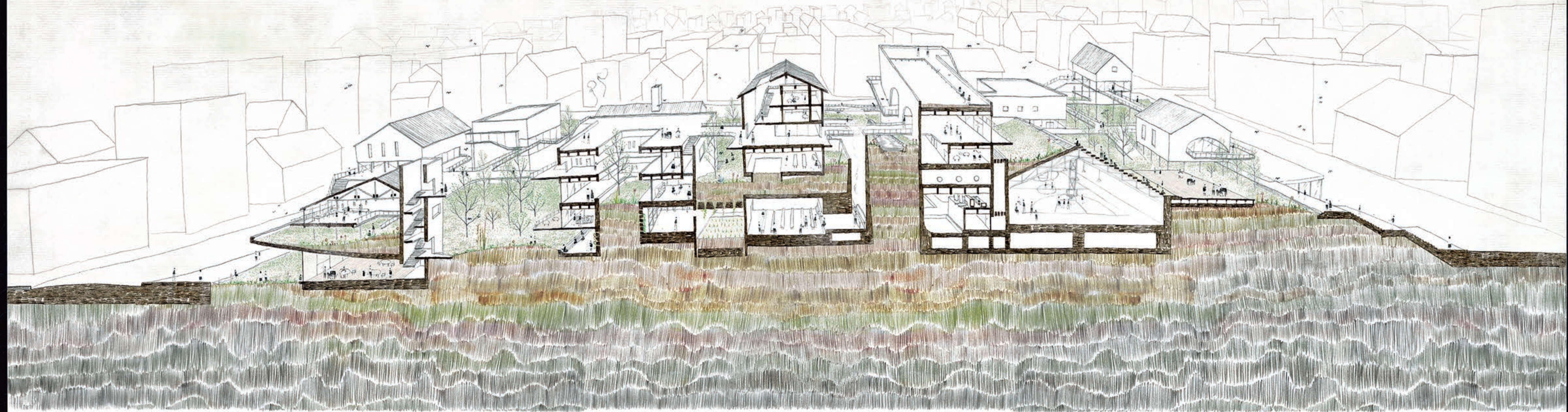


住まいを支えてきた「地」を更新することで、街の過渡期を乗り越える次世代の暮らしを提案する。
都市が持つ隙間の空間に大地を長い年月をかけて積層し、新たな街のインフラとなる「地」を育てていく。

新たに再編される「地」は近代都市が作る住居間の境界を取り払い、人々のつながりを生み出す。
コンクリートに覆われていた地盤面は剥がれ落ち、温かみのある土が顔を出し、
健やかに芽吹く自然が人々の暮らしを彩る。

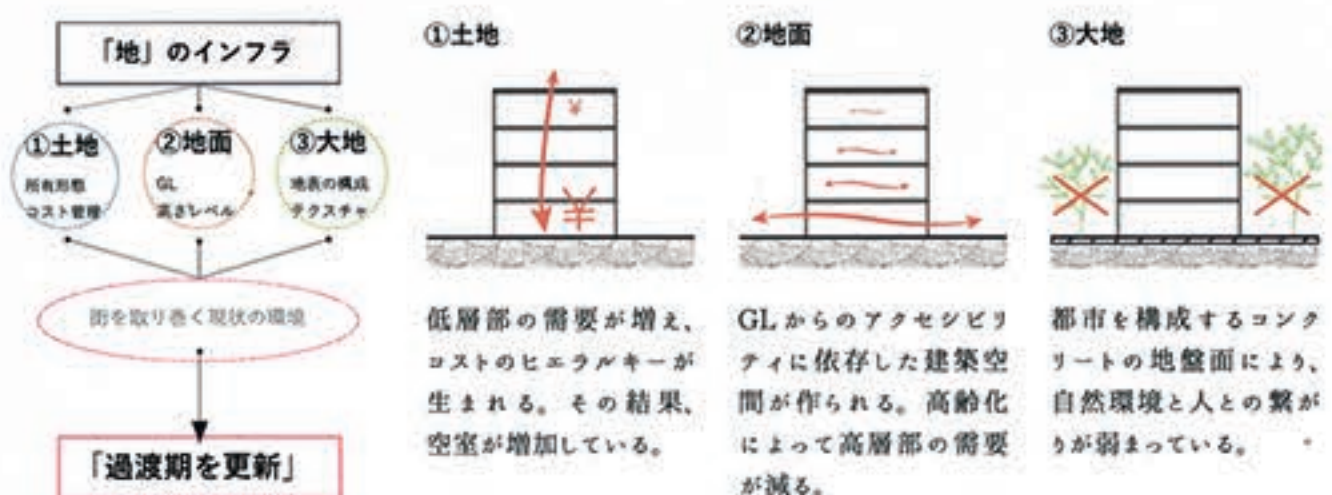
積もる地平線



1 「地」の過渡期

■「地」のインフラが抱える課題

我々の暮らしの基盤は「地」にある。
日本人は大地を耕し、農業を行い、作物を得ることで自然とつながりを持って暮らしていた。次第に大地をコンクリートの地盤に変え、土地ごとの境界線を描くことで所有の領域を定め、地面に基礎を打って大きな建築物を建て、人々の暮らしをより豊かにする社会そのものを作った。我々の街は歴史の中で、「地」というものを常に基盤とし、発展・成長してきた。そんな中、我々の生きる街に「地」の過渡期が訪れようとしている。現代社会が抱える「地」課題を三つの領域（土地、地面、大地）に分けて捉え、次世代への更新を思考する。



2 「地」のインフラの更新

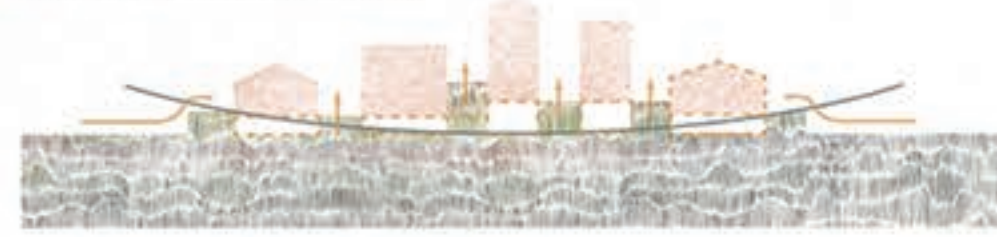
■時間をかけて大地を積層する

① 現状の住宅街の関係性



現代の住宅は個々ではっきりとした境界をもち、隣接する家同士の、街との関係性が希薄である。加えてコンクリートの地盤面が人と自然の間に固い境界をつくり、賃貸住宅での人々の暮らしは均質なものとなっているように感じる。

② 「地」のインフラの更新



時系列の中で社会状況の変化に応じて、コンクリートの地盤をはがし、都市の残土を利用しながら都市の持つ隙間の空間に「地」を積層していく。新たなGLが住宅同士の連続性を作る。「地」を積層したレベルは減築し、好況に開いたボイドになる。

③ 「地」に合わせた住まいの変化

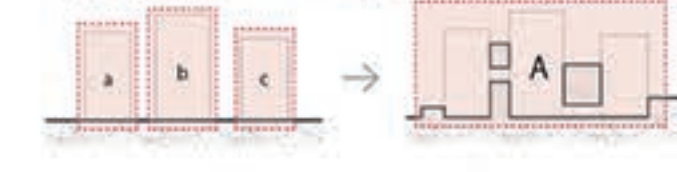


新たな「地」のインフラは自然環境と共存する暮らしや公共に開かれた地下空間を生み、層ごとに異なる次世代の暮らしを作る。個々の建物は長い年月をかけて立体的に接続し、「地」の変化に合わせて、場所ごとの価値が変わり、それに合わせた建築物の開発が行われる。

■新しい暮らし方

① 土地

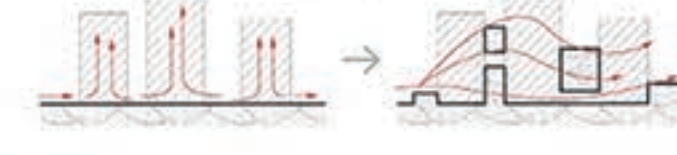
建物ごとではなく街全体一つの建築としたマネジメントが行われ、敷地境界を持たないような場の関係性を築く。



賃貸系の住まいにおいては住居者の家賃の一部が公共施設の管理費として支払われる。住人は無料で施設利用ことができ、一人一人が街まるごとに住まうような感覚を持つ。

② 地面

街全体の動線が立体的に繋がり、階の概念が無くなることで高さによっていたアクセス性の優劣は解消される。



建物の境界区分が曖昧になり、高さの層ごとに機能が繋がる。水平方向に自由に伸び縮みする空間性が生まれる。

③ 大地

街を覆っていたコンクリート地盤は大地に解放され、人間と自然環境の新しい距離感を持った関係性が生まれる。



地上や地下内の気温差を活かした生業の風景が広がる。

3 「地」が支える暮らしの未来

■水害への適応

コンクリートで形成されているわれわれの生きる近代都市は水害に対し、強く、硬く妨げようとしていた。本提案ではそれとは対照的に弱く、柔らかく受け入れるような土の地盤面によって形成する。



■建物寿命の更新

これから起こる既存建築物の老朽化に対し、建物を部分的に地中化、あるいは減築していくことで長寿命化を図る。地下の空間部分には土の荷重を受ける耐力壁を増築することで建築の下層部は安定した環境を獲得する。



■新たな環境設備

地中の安定した温熱環境をヒートポンプやタームチューブによって積極的に利用することで、空間の居住性を確保する。また、雨水を地層によってろ過し、貯水することで、植生管理や農業用水、生活用水や緊急時の災害用水の為に水源を確保する。

